「唐代小説研究」（その四）

劉　開　榮著
西岡晴彦訳

承前

第四章　進士と妓女の恋物語
―鶯鶯伝と霍小玉伝―

第一節　鶯鶯進士と妓女の恋愛譚とその背景

進士と妓女の恋物語は、現実社会での進士と妓女のやりとりと恋愛を背景として産みだされた文学である。この文学は、抒情性に富み、結末は悲劇的である作品が多く、封建的な社会背景に起因する解決不能な葛藤から産み出されたものであり、悲哀感を漂わせた作品である。これらの作品は、芸術の宝庫のうちから不滅の輝きを発し、読者に愛されつづけた文学である。

唐代の文学史を開いてみると、詩と小説は王冠を飾る二つの宝石であり、その十中八九は進士たちの喜びと悲しみの感情の結晶表現である。そしてその「結晶」には、様々な意味で妓女がかかわっている。直接的又は間接的に、恋愛関係又はそれ以外の関係で、妓女と進士のかかわりを描いた作品の数はかなり多く、重要な地位を占めている。したがって唐代文学史は、進士と妓女を扱った文学で占められていると言っても過言ではないのである。詩についてはさておき、ここでは、伝奇小説中の「妓女」についておおまかな分析を試み、ついで鶯鶯伝、霍小玉伝をその代表作として詳細な評価を加えよう。

進士と妓女をめぐる話がうまれてくる背景は何であろうか？　中晩唐、特に晩唐時代にこの種の作品が多く、それは当時の社会情勢と深いかかわりをもっている。唐の王室は、元来、西方の胡人と関係が深く、六鎮集団[1]が中原を統一して以来、胡人の風習が社会に一般化してきた。朱子語類に「李唐の源流は夷狄に出ているから、婚姻関係が礼を失している」とあるのは正しい指摘である。唐の初期は、国策として山東の旧貴族（中国本土の東漢以来の士大夫階級）を抑圧することを目的とした。その上、則天武后は、特に雑文や詩詞をもち上げて、経学や儒教を棄て、第三の新興階級たる進士（第三章参照）を大いに抜擢した。その結果進士達は、中宗、睿宗朝になって、大いに勢力を得るようになった。ここで二つの史実をあげ、当時の社会をうかがうこととする。

「中宗の景竜三年夏四月に、修文館学士を置き、公卿で文章の上手な李嶠等二十余人を選び、天子の遊宴に侍らせて詩作させた。上官昭容（上官儀の孫娘婉児）がそれに甲乙をつけた。こうして天下は華やかな表現を競い、儒者風のまじめさは流行おくれとなった。」〈歴代通鑑輯覧　五三〉

「唐の中宗の頃、清源郡の尉呂光泰が上書して時の政治について

言った『このごろ、町中で人々は胡人のかぶる渾脱帽をかぶるものが多く、馬に乗り、胡服を着て群をなしている。それを蘇莽遮と言う。旗を持ち、鼓をうちならして、やかましく走りまわっている。(これは胡人の遊戯の一種、正史には『中宗が潑寒胡[2]の舞戯を好み、いつも親しく見に行っていた』とある)礼儀を重んずる朝廷で、野蛮人の真似などをするのは、先王の道ではないのに、かえってそれを四方に示そうとしている』……」〈洪邁、容斎四筆、十五〉

胡人の文化がおくれていて、未だ封建制に到っていない段階では、皇族の婚姻についてのむつかしい規制はなかったし、新興の進士階級は、身分的に下層なものが多かったから彼等も形式的な礼儀作法の観念はもっていなかった。一方宮廷で開かれる宴席では、女性がメンバーとして参加するのがあたりまえとなった。こうして女性は、社交界、文壇、政治舞台にまで、大いに活躍の場をあたえられた。さきに挙げた上官婉児などは目立った存在だが、大平公主(武后の娘)、安楽公主(韋后の娘)その他の公主たちも、政治的なポストにつき、親王などと同じく、公然と政治にたずさわった。

玄宗が即位すると、武后時代の余波を粛清し、儒教を尊び、山東貴族の再起を促した。又、高力士の任用により宦官の政治関与の道が開かれた。憲宗朝では李吉甫が宰相となり旧貴族が政治的に台頭し、ここで進士貴族の党争が爆発するのだが、同時に李吉甫父子や鄭覃などが懸命に礼法を強調したので、公主たちはその掟に従わねば貴族へ嫁ぐことがむつかしくなるという風潮が生まれて来た。これについては前述した通りだが、一つだけつけ加えておく問題がある。それはこの時代風潮と妓女との関係である。即ち、封建勢力の復辟によって上流社会の女性たちは再び家のなかに閉じこめられはじめた。ただ科挙の制度は内容もそのままに存続し、山東貴族はこれを目の仇にしたが、廃絶する力は無く、寧ろこれに屈伏したのであった(三章一節参照)。そこで彼等も懸命に、当時の風潮にあわせて詩文を学び、政治上の優位をめざすこととなった。つまり彼等は一方では伝統的な礼教を唱えつつも、一方では、進士の華美な雰囲気、ことに、その得意とする詩や雑文に影響されざるを得なかった。その文学は抒情的で、その題材は必然的に、両性の交渉と恋愛であった。ところが、上流社会の女性は皆礼教に縛られていて、容易に男性の対象とはならなかった。そこで当時社会的には賤民の階層にあった妓女が活躍の舞台を獲得することになった。そして妓女は上流社会の男性との交渉により、精神的に向上し、教養を高め、社交上の訓練を経ることになる。かくして人々は、例えば、元稹が心から愛した妓女薛濤のこと(〈雲溪友議〉参照)を聞き及ぶと、彼女に注目し、多くの地位ある人々が、彼女の弁護に乗り出し、彼女こそ貞女の鑑であると称えたのであった。[3]

進士と妓女の結びつきには階級的な懸隔による厳しい障碍があり、恋愛成就の後には悲劇的結末が生み出されるのが常であった。進士と妓女をめぐる物語は、唐代の悲劇的文学の源泉となり、その芸術的価値を高めてゆくのである。

(原註) 1 文宗は荘恪太子の妃を選ぶことになり、朝臣の家の娘達は名前を提出させられることとなり、一般人に至るまで不安を感じた。天子はそれを聞き及び、宰相に言った。「朕は太子の結婚の相手として汝陽の鄭氏の娘を選びたいと思っておる。ところが臣下の輩は朕と姻籍関係になりたくないらしい。なぜなのか? 朕は数百年もの古い家柄であり高祖皇帝のお叱りをうけるいわれもないのに。」

こうして嫁えらびは沙汰やみとなった。(〈太平広記〉巻一八四)

（盧氏雑説より引用）

注

（1）六鎮とは北魏におかれた軍政地区、鮮卑匈奴系の北系豪族、中国内地の豪族が移住した。懷朔、武川、撫冥、柔玄、沃野、懷荒の地域、この豪族がのちに唐を興す主力となった。

（2）蘇幕遮とは元来西方の胡人の音楽の名である。胡人が小羊を殺すときに舞ったダンスの伴奏音楽がもとで、中国に伝えられた音曲、のち詞曲の名となった。胡語の音訳である。

（3）厳寒の時に、少年が裸体で隊を組んで跳舞するのに見物人が水をかける舞戯で、西域から伝来した。前注の蘇莫遮の音曲によって踊る。

（4）長安の名妓、字は洪度、もと長安の良家の娘、詩に巧みで、元稹・白居易・杜牧と唱和した。

第二節　中晩唐進士の華美な風潮

牛李の党争が激烈になったころ（第三章参照）「浮薄にして礼をわきまえず」という言葉が進士たちを攻撃するためによく用いられた。例えば、（〈新唐書〉一六五　鄭覃伝）では「譚は文辞を喜ばず、進士連中の、軽薄が傲慢なことを憎み、進士科の廃止を建議した。『南北朝が治まらなかったのは、文が質に勝ったからだ。官吏は行政能力で任用すべきであり、文才などは必要ない。』又『文人は軽薄な奴が多い』とも言った。」

進士が軽薄で妓女と遊びまわったのは、中晩唐期、とりわけ晩唐期の一般的現象であった。晩唐人の作品にはその雰囲気をもつものが多い。娼妓に関する専著も幾篇か見られる。例えば孫棨の〈北里志〉崔令欽の〈教坊記等〉である。忠義な大臣だった韓偓でさえも、〈香奩集〉という詩集があって、後人はその詩があまりにも艶めいていたので、彼のために弁解している。晁公武は、〈郡斎読書志四〉でこの詩集の作品を和凝としていた。〈全唐文八二九〉には韓偓の「香奩集自序」があり、そこに、「まじめでないとお咎めのむきは、どうぞ私の功績（政治上の）で勘弁して下さい。」と言いわけがしてある。だが実際は、そんなに気がねする必要はないのだ。当時一般の風潮からして、彼だけが特に批難されるいわれはないからである。

晩唐期の進士連中の軽薄なありさまを表現しつくすのにはかなりの編巾を要するのだがここでは、唐末五代の人々の記載をいくつかあげて例証しよう。

「咸通十三年、新たな進士連中は月燈閣に集って蹴鞠の会（球技大会）をひらき、競技後仏閣に登って痛飲した。競技場の周囲には、観客席がズラリと作られ、観客は帷をとりはらって見物した。」（王定保〈唐摭言〉巻三）

「新しい進士は、桜桃の宴を格別に重視したと言われる。そのわけは次の通りである。乾符四年、永寧の劉公の次男、覃が進士に及第した。その頃劉公は淮南の鎮相であった。彼は息子の祝賀費用として銀一鋌（銀の単位）を下僕を通じて送っていた。しかし実際の費用はその数倍かかったのである。新たな状元として推薦されるに及んで、覃はいろいろ考えた末、人をやって大金をだして桜桃数十石を預約買いしめさせ、それを宴会にもちいて諸方の名士を呼びよせた。そのころ桜桃は初物で、貴族や金持でも、食べていなかった。覃はそれを山と積み上げ、糖蜜や乳酪をまぶし、立派な酒器に盛って人々にすすめた。それだけでも桜桃の量は数升におよび、供まわりの者にいたるまですべてにふるまわれたのである。」（同右）

「咸通のころ、進士が及第して、宰相にお目通りがおわってからは、軍馬や従者の服装にいたるまで、贅沢をきわめたものをもちい

た。そしてほんのすこしでも礼式にはずれると、重い罰金を課せられることになった。」（同右）

「李嶢は及第し、起居宴（先輩をもてなす宴会）がすぐに迫ってきた。小雨が降りやまないので、油引きの幕を張りめぐらし、宴会場を覆った。嶢の父祖の旧居は升平里だった。で、彼の自宅から一里余にわたって、七百緡の金を費して幕を張った。宴会の参加者は千人を下らず、騎馬、車輿で道いっぱいになったが、誰一人濡れることなく、道は金ピカに輝き、大いにほめそやされた。」（同右）

上述の如き大宴会の様子は、千年後の我々にも大へんな驚きであるが、ひるがえって唐代の歴史にてらしてみると、そこに一つの社会的な矛盾を見出すこととなる。即ち唐王朝は安史の乱以後窮乏し、民衆は苦しんでいた。とりわけ晩唐の武宗・宣宗以後、国家は気息奄奄の状態だったのに、進士たちがかくも贅を極めることができたのはなぜか？　ここには二つの原因がある。

（一）　社会政治的原因　咸通以後は党争はすでに治まり、新旧の支配者間の妥協・統一がおこなわれ（第三章参照）特殊な官僚階級が成立した。進士制度は存在したが、その質は変ってしまい、平等・公開による平民参加の機会はもはやなかった。孫棨の〈北里志〉の序に、次のように言っている。

「進士制度によって進士になる人の数は、この時代（晩唐の宣宗朝時代）に空前の多きにのぼったが、その殆どが貴族の子弟で、庶民出身者は年に三人以下であった。」

武則天のつくり上げた科挙制の美点がこの時代に無残に破壊され、少数の貴族の子弟によって進士の座が独占され、一般庶民には手のとどかないものとなりはてていた。だから人々は皆贅沢を競いあうようになった。科挙は、国家が才能ある人物を集めるための制度ではなく、少数者が官僚名簿をたねに見栄の張りあいをする機会を提供するものとなりはてたのである。だから進士連中の華美なふるまいは、社会の繁栄を示すのではなく、「朱門ニ酒肉ノ臭アリ。路ニ凍死ノ骨有リ」（杜甫の詩句）という畸形的状況を表現しているのである。

これ以外にも、社会一般に、進士に対する崇拝や重視があり、進士連中を傲り高ぶらせる原因となった。これが上述の原因ともかかわって、ひとたび進士の列につらなるや、社会ではこれに取り入ろうとし、その意に迎合しようとする人々が出てくるのである。

「元和の頃、李賀は歌篇をつくるのがうまく、韓愈に重んぜられ、上流階級の間に大いに吹聴され、その名声は華々しいものであった。その頃元稹は年若くして明経に合格したので李賀と交際したいと思って、ある日、彼を訪れた。李賀は彼の名刺を見ると、下僕に『明経に合格したぐらいで、何でこの李賀に会いにくる必要があるか』と言わせた。」（〈旧唐書〉一三七）（劇談録より引用）

思うに元稹はこれを恨みに思い、後年、枢要の地位についていた時、李賀の父の名が晋粛であることを理由に、李賀を進士に受験させなかった。韓愈はこのために「韓弁」を作ったのである。

「李珏の祖先は趙郡出身である。はじめ十五才で明経に合格した。李絳は華州の刺史であったが彼に会って言った。『この人物は日角珠廷[1]の相があり、非凡な人格だ。明経は凡人のなるもの。彼には不似合いだ』そして更に進士に推挙したのである。」〈新唐書〉一八二　李珏伝）

進士は社会的に、生来の能力をもつ存在として崇められていたから、実力を伴わない傲慢さを身につけてゆくのも自然のなりゆきであったのだ。

（二）経済的原因　唐は太宗が突厥を平定してから中央アジアにシルクロードを開通させ、高宗・武后から玄宗に至るまで、国際貿易は極めて発達した。安史の乱後、吐蕃（トルファン）が西北地方を侵略し、中央アジア路線が遮断される。国際貿易は西南又は海上を通じて行われるようになる。当時「揚（揚州）一、益（成都）二」という俚諺があり、その地方の繁昌を表わす。商業貿易はこのように畸形的となり、そこで二種類の成り金が産まれてくる。その一種は官僚である。〈新唐書〉一八二　盧金伝）に「（太和の頃）鈞は嶺南節度使に任官した。海上の路を通って商船がやってきた。こういった場合、役所をあげて、商船から安い品物を買い漁るのが普通だったが、鈞は一度もそんなことをしなかった。」

とある。又（〈新唐書〉一七七　李翺伝）には、

「盧昂が賄賂事件に連座した。簡辞が訊問追及すると盧はすぐさま、珠飾りのついた金の枕をさしだした。一升枡ほどの大きさである。敬宗は『これは宮中にも比べもののないくらいの品だ。昂よ、役人によく知らせておけ』と言った。」

とある。いわゆる富家の子弟とは、悪徳商人と結託したり、汚職をしたりする官僚の子供のことを言うのである。彼等は政治を専断し政治経済の結実を独占した。財産や宝物は少数の人の手に集められた。だから彼等は大いにゆとりがあった。

その二番目は商人である。国際貿易が盛んになり、商人は大いに富んだ。だが商業資本が工業に投資されなければ、その富は宙に浮いてしまう。金がダブついても、一般庶民の生活は向上せず、農民の土地を呑みこみ、高利貸資本に転化する。都市の繁栄にしたがって、富はますます少数の大商人の手に集中し、農村の破産、農民暴動をひきおこす。こころみに当時の詩人の揚州についてのコメントをあげてみよう。

杜牧「春風十里珠簾」（春風の中に十里に亘（わた）ってつらなる珠の簾（すだれ））

張祜「十里長街市井連、月明橋上看神仙、人生只合揚州死、禅智山光好墓田」（十里もの長さに市街地がつらなり、月明橋の上では神女の如き女性（妓女）に出会う。人は一生の死に場として揚州の地を選ぶべきだ。禅智山は巧好の墓地なのだから。）

徐凝「天下三分明月夜、二分無頼是揚州」（天下を三分した明月の夜以来、天下の好（す）き者の三分の二が、この揚州に集った。）

以上の例から、揚州の色町の繁昌の様をうかがうことができよう。

我々は揚州の繁昌を前述した進士たちの豪奢のみに目をうばわれていては、その後に社会の表面にうかびあがってくる恐るべき危機即ち農民革命（黄巣の乱）がすでに弓につがえられた矢の如くに準備されつつあったことを見通すことはできまい。政治の暗黒、経済的不平等、それらは結果として農民暴動を産む。中国歴代の王朝のすべてが、こうしてその命脈を絶たれてゆくのである。

註

（1）日角珠延、日角は額の中央の骨が日の形に隆起していること、珠延は豊満な額のこと、あわせて貴人の人相を言う。

第三節　妓女の生活と社会的地位

唐代の妓女の生活について詳述した作には孫棨の〈北里志〉に勝るものはない。孫氏はその序文で次のように述べる。

「都の妓女たちは教坊に籍をおき……平康里に住んだ。新たに及第した進士や、主要官庁の役職につく予定で発令前の者、発令後赴任前の人等が出かけてくる。金に糸目はつけなければ、各地から来

た美女を意のままにできる。妓女たちも、弁舌さわやか、知的にも高い水準の持ち主であった。嫖客は彼女たちを源氏名でよぶ。妓女の方では客の品定めをしその人物を見抜き、適切に対応する。まことに鮮やかな手なみである。……このごろ才女として名高い蜀の薛濤のことを聞いたが、何のことはない。この北里ではどんな妓女でも薛濤が恥じ入るぐらいの教養はみな身につけているのだから。」

右の記述からすると、これらの妓女たちはフランス十七八世紀のサロンの女たちと似ている。彼女たちは歌も上手、ダンスも上手、そして宴会の主要な座持ちであった。人物の目利きをし、文学を左右した。文壇に登場する新人たちは、彼女たちの紹介や手引きで、上流階級の高官連とわたりをつけることができたのであった。唐代の妓女たちが、このサロンの貴婦人たちとちがうところは、その出身が貴族でなく賤民だったことである。そしてあの「奇妙」な礼教の教えによって、上流の婦人の行動が制限されたので、彼女たちの活躍が不自然なほどに活況を呈することとなった。妓女たちは、一方では、その行動を階級的にきびしく制限されていて、自らの身体を贖わない限り、自由を得られなかったし、士人の正妻には、一生なることができなかった。又一方、経済的に拘束され、他人のもとで働く立場で生きねばならなかった。したがって彼女たちは表面的には、贅沢な暮しをしているようだが、実際上の社会的地位は極めて低かった。彼女等は売られたり、他人に「寄贈」されたり、私有され、その身分は奴隷に等しかった。妓女の一生には三つの出口があるだけだった。年老いてから仮母（やりて）になって同じ仕事をつづける。人の妾になる。出家して女道士か尼になる。この三つである。ここに徐月英という妓女の詩を紹介しよう。

「為失三従泣涙頻、此身何用処人倫、雖然日逐人生寄、長羨荊釵与布裙。」（この世に頼るべき人もなく、涙に濡れているこの私、この身を人の世のどこへおけばよいのやら、おもしろおかしく日々は暮れてゆくけれど、なみの女のしあわせだけをいつもいつも願っている私なのだ）

この二十八字のうちに妓女の悲しみと辛さが読みとれるだろう。彼女たちは、礼教の枠の中に入る資格を持たないため、どれほどの涙を流したか知れないのである。〈北里志〉の記載の一部から妓女の生活をもうすこし紹介してみよう。

「楚児は字を潤娘といった。三曲（南中北の三曲、南と中は上品、北は下品とされる）中でピカ一といわれた妓女であった。弁舌さわやか、詩名も高かったが、年増になったので、万年県の捕手の郭鍛という男に身請けされ、他の場所へ囲われることとなった。」

「鄭挙挙は曲輪にいたが、酒令（宴席の遊戯）に巧みで、当時の名妓絳真と競いあうほどの才気の持ち主だった。おえら方の賓員が多かった。」

「顔令宝は南曲にいた。物腰が雅びで、好みが高尚だったから、当時の有力者に可愛がられた。文才も高く、詩作もすぐれ、挙人と会えば礼を尽して詩歌を乞い、詩の応酬をした。自分専用の五色の用箋を常に文箱に蓄えておいた。後に、重い病に罹った時、春の暮色を賞で、侍女に扶け起こさせて庭に臨み、花の散るのを見ながら長嘆息することしばし、筆を執って、次の一首を作った。

『気余三五喘、花剰両三枝、話別一樽酒、相逢無後期』（私の息はもうすこしで途切れそう。花もまたあと二三枝をのこして散りはてた。さあ、一樽の酒を汲みかわして、お別れの挨拶をしようか。もはやまたの逢う瀬を契るすべのないこの身なのだから）

そして、召使に言いつけた。

『私のためにこの詩を持って行って、新しく合格した旦那方や挙人たちに差しあげ上げて、言ってやって下さい。曲輪の中の顔氏の娘が病をおしておつかえします。と、』

家に酒肴を用意させ、連れてきた数人の男どもと、夜中まで宴を張り、涙をハラハラと流して、

『私はもう永くない。皆さん、私の最期を哀れんで下さいな』

と言うと死んでしまった。野辺の送りの日に、書き残された文章が出てきたので、母が読んでみると、それは皆、おとむらいの歌詞ばかりであった」

第四節　鶯鶯伝・霍小玉伝の悲劇性分析

鶯鶯伝・霍小玉伝はともに進士と娼妓の恋愛の悲劇を描いた小説である。その悲劇の原因は、男女二人がそれぞれの属する階級のちがいのために、恋愛の目的を達することができないことである。

鶯鶯伝は作者が個人の社会的モラルを「失敗をつぐなう」という形をかりることによって宣伝しようとした作品である。書かれた年代が比較的早かったので、進士が妓女と戯れる風潮がそれほど一般化していなかった。したがって作者もその心情をあまり露骨に描くわけにはいかず、内容が曖昧ではっきりしない部分も多く含まれている。描写にも制約があり、思いどうりには描かれていない。そこから作品の前半では崔鶯鶯を名門の令嬢とし、後半では、他人は害をなす存在（妖孽）に変えている。一方自分を「始乱終棄」（恋をしかけ、のちに棄てる）薄情者としつつ、後には、妖孽にうち勝ち「よく過ちをつぐなった」人物として、称賛される存在にしたてている。この前後の矛盾は、読者にはどうもはっきりしない。彼の薄情な行為が何故に社会から称賛を博すことになるのか？（この点については陳寅恪先生の「読鶯鶯伝」が解答している）ところで、霍小玉伝を読んでみると、この疑問がスッキリと解けてくるのである。霍小玉伝はその輪郭が鶯鶯伝とよく似ていて、成立年代が遅い。進士が妓女と戯れる風潮がさかんになり、作者は気兼ねなしに書けた。ことに作者が第三者的立場にあったので、ありのままを正直に、詳細にわたって書くことができ、読者は一読してその内容を了解することができる。霍小玉伝の発展とも、註とも、註解とも言えるのである。霍小玉伝の詳細をきわめれば鶯鶯伝のテーマも理解できるようになる。鶯鶯伝中のすべての難解な部分は霍小玉伝の中に答が出されているのである。したがって霍小玉伝を研究すれば鶯鶯伝はスッキリとわかるのである。

ここで霍小玉伝の研究に入るまえに、参考に北里志の中でその著者孫棨自身の経験を記した部分を引用しておく。霍小玉伝の内容を考える際に、当時の事実を見ておくことが、憶測や、速断をさける有力な方法と考えるからだ。

「王団児は前曲の一番目の家の妓女だが、すでに仮母（やりて）となっていた。妓女が数人あり……二番目が福娘、字を宜之と言った。頭がよくて、肌はつややかで、均整がとれていて、言葉つきが上品であり、詩文の格式も整っていた。宜之は、宴会がたけなわになるころにいつもやりきれないほど惨めな表情をする。一座のものは、そのために白けてしまう。そうすると、静かに、こんなことを自問自答するのである。『私のここでの行跡はもうとりかえしのつかないものなのかしら、どうやったらもとへもどれるのかしら。それを思うと悲しくてどうしようもなくなってしまうの。』数日してからこんどは紅い便箋を私に渡しておじぎをした。見ると詩が書いてあった。

日日悲傷未有圖、懶將心事話凡夫、非同覆水應收得、只問仙郎

有意無（行く末のことを考えるにつけ、日々悲しみがまさり、心の奥をつまらぬ男にうちあけるのもやり切れない。もとのきれいな身体にもどるすべもない。ひとえに、貴方の胸のうちが知りたいだけ）

私はそれに答えて言った。

『お前の気持ちはよくわかるが、私はまだ挙人になってない。どうしようもないのさ』

すると妓女は泣きながら言う。

『私は幸いにもまだ教坊に籍を入れていないから、貴方に実があるなら百か二百の金で身請けして下さらない？』

私が答えないでいると、さっきの詩に和韻してほしいと言う。そこで私はその詩箋の余白に以下の詩を書いたのである。

妙如何有遠圖、未能相爲非夫、泥中蓮子雖無染、移入家園未得無

（美しく聡明な貴女にも遠い未来は見えぬらしい。私もまだ買いかぶっているらしいが、かりにそなたを落籍したとて、泥の中から生えた蓮がまだ汚れていなかったとしても、家の庭に移し植えてうまく行くわけはないのだよ

妓女はその詩を見て泣き、もう一言も言わなかった。それ以来情愛は頓に薄くなっていった。その夏、私は彼女をつれて洛陽へ行った。そこで酒を汲みかわしたが、酔うほどに彼女は

『この歓びがもっとつづけばいいのに』

と言って泣くのであった。

その後、冬の初めごろ都へ帰り、金持ちに抱えられ、私とは会えなくなった。（曲輪の中の妓女は、金持ちが日に一緡の金を仮母に支払って「買い切り」になる）

春の上己の節句に、私は知り合いの者と曲水の祭りに行ったが、隣の部屋から音楽が聞こえたのでうかがってみると、……二人の妓女がいて、それは宜之とその母であった。……能之（妹分の妓女）が紅いハンカチにつつんだものを投げてよこし

『宜之の詩です』

と言った。そこにはおちついた筆跡で

久賦恩情欲託身、己將心事再三陳、泥蓮既没移栽分、今日分離莫恨人（貴方の久しい愛情に、この身を委ねようと、思いのたけをいくどもうちあけましたが、泥に生えた蓮のこの身は、移し植えられるすべもなく、お別れした今、お恨みなどいたしません）

と書かれてあった。私はこの詩を読み悲しみにくれてひきかえし、もうその家を訪ねることはなかった」

この物語は霍小玉伝の悲劇の原因をはっきりさせるだけでなく、鶯鶯伝の構成と全くよく似ているのである。「久賦恩情」といっても彼等は一日中愛しあっているわけにはいかないのである。孫氏は自分が挙人（進士候補生）であり、まだ進士に合格していないから名門の娘と結婚する以前に一人の妓女の為に自分の前途を犠牲にするようなマネはしないのである。唐代の人間にとって、結婚と就職はきわめて密接していた。（第三章参照）かりに妓女と心から愛しあっていても、その愛を棄てて自分の属する階級の女性と結婚せねばならなかった。そしてひとたび結婚に失敗すれば、社会的に疎外され、政治上の前途は一挙に失われてしまうのである。これは単に唐代社会のみにとどまらず、ヨーロッパの封建制下の貴族にとっても同じであった。西洋の十八九世紀の小説には、このような話がきわめて多い。〈北里志〉の孫氏の遅疑逡巡の様は、そのまま鶯鶯伝や霍小玉伝の男役が、ためらい惑い、衝突した事柄であった。そして彼等は一様に、「忍情」（情をこらえ）たのである。

霍小玉伝中の主要人物について論じてみよう。作者は主人公の霍小玉を霍王の末娘としているが、これは唐代人の好む貴族趣味であり、仮託である。霍王軌は太宗の兄弟で（〈新唐書〉七九、霍王伝）武后の垂拱四年に、越王貞とともに武后に叛き、死罪となっている。小説中での「大暦」とは九十年も隔っていて、大暦年間に十六歳の娘がいるわけはない。

今、作者の描いた小説の背景を考えるに、小玉は明らかに、当時の平康里の妓院のうちで成長したみずあげ前の美少女であった。当時の風習では、妓女のみずあげは、いろいろと儀式があり、普通の家の結婚の儀式とほとんどかわらない。相手となる男をさがすのも一般の家の婿さがしと同じであった。李益が小玉の家へ行った時、小玉母娘は大喜びしたのは当然である。李益は当時文壇で錚錚たる「文章の李益」という名を得ていた天才青年作家だったのだから。〈新唐書〉一三七　には彼の生涯を次のように記している。

「李益は、粛宗朝の宰相揆の族子である。進士に及第し、詩歌の才に長じていた。貞元末に同族の李賀（韓愈に重んぜられた神童）と並び称せられた。詞を一編作るごとに楽士が金を出して買いとり、天子に捧げる楽曲の歌詞とした。彼の「征人歌早行篇」は好事家が屏風に書いて珍重した。回楽峯前沙似雪、受降城外月如霜（回楽峯の前の沙は雪に似て、受降城外の月光は霜のよう）の句は天下に知られた歌詞である。しかし彼は若い時から偏執狂的に疑い深く、妻妾を異状なまでにきびしく家にとじこめ、灰を撒いたり、鍵をかけたりしたことで当時噂話になり、「妬痴」とよばれた。（これは小説の後段と照応する）李益はこの悪癖のために、永いこと仕官できず、同輩の人々が高位についたのに、失意のまま北方の河朔の地にいた。……憲宗がそのことを聞き知り、河北から召しかえして秘書少監、集賢殿学士としたが、李益は才能を自負しすぎ他人を侮り無視したので人から疎まれた。太和の初年、礼部尚書をつとめて卒した。」

彼は宰相李揆の一族だったので、若くして進士に合格、詩歌の道に長じ、その歌詞は皆教坊で唱われ、宮中で採用される。といった当時の社会において、風流の理想を体現した人物で、高級な娼婦こそが追いもとめる対象であった。彼の方も自分と才色ともにつりあった妓女を求めることを夢想していた。そこで、仮母の鮑十一娘は彼に霍小玉を紹介する。

「……天から降った天女みたいなお姫様があって、お金はいらない、センスのある男性ならっておっしゃるのよ、これには十郎様、貴方ならぴったりだわ」

この出会いでの二人の希望条件はぴったりだったのだが、一つの基本的な差別が、この悲劇の運命を定めてしまう。小玉は新婚の歓びのただ中で、急に泣き出し、男に告げる。

「私は遊び女の身、とうてい貴方の奥様になれるはずはありません。今は若くて可愛いと、情をかけていただいていますが、年をとって繦緻がおとろえたら、きっと貴方の愛をつなぎとめることができず、根なしかずらのように頼りなく、秋の扇とうちすてられる身になりはしないかと、貴方に抱かれている今さえ、ふっと悲しくなって……」

彼等は、二年の間悦楽をきわめて生活をおくったが、李益は進士に及第し、鄭県の主簿となる。これは彼の生涯の仕事のかわきりであり、ここで彼は、結婚問題と真剣にとりくむ必要に迫られる。ここで彼等の遭遇した問題はもはや解決を先に延ばすわけにはいかなくなった。そこで小玉は一つの妥協策を考える。

玉は李に言った。

『貴方の才能、地位、評判ならば、多くの人から慕われ、結婚を願う方もきっと多いことでしょう。お宅には母上がいらっしゃるのに息子の嫁がまだですから、お帰りになれば、すぐ御良縁が待っていますわ。そうすれば、お互いに盟った愛の言葉も、無意味な絵空ごとになってしまいます。けれど私には小さなお願いがあります。ここで申し上げてお心にとめておいていただきたいのですが、聞いて下さいますかしら』

李はいぶかりながら言った。

『私が何か悪いことでもしたんだろうか、だしぬけにそんなことを言い出して、言ってごらん。私はそのとおりにするから』

すると小玉は、次のように言った。『私は十八になったばかり、貴方もやっと二十二歳。貴方が三十の壮年期になるまで、まだ八年あります。この八年の間に私の愛の命を燃やし尽くさせて下さい。貴方はそれから立派な家柄の方と似合いの夫婦になられたって婚期がおくれたことにはならないはず、私はそうなれば、この浮き世をすてて髪をおろし、墨染めの衣を着て、尼になりましょう。このお願いを聴き入れて下されば、それで私は満足です』

これはきわめていじらしい妥協なのである。彼女は数年の愛の時ののちに、仏門に入ることによって、恋人の将来の仕事や地位を保ってやろうとする。しかしこのささやかな女の願いも運命の魔手を免れることはできなかった。李益が家に帰ると、母親はすでに彼の為に当時第一流の名門盧家の娘を嫁とすることに定めていた。李益はそこでいろいろと苦労して百万の金を結納のために借りあつめ、この申し分ない公認の結婚を成功させるのである。

もし彼がその時に妓女と結婚していたなら礼部尚書になれなかったばかりではなく、文壇に入ることも（礼部を通って進士の試験を受ける）まして上流階級の一員となることはできなかった。この主人公は、家や社会のしくみに抵抗する勇気が無かったので、悲劇性は一層高まった。その結果ヒロインは死ぬ。

これは自然の成り行きである。

そうでなければこの作品は人生を描いているとは言えない。この作品と鶯鶯伝の悲劇的な内容とはまったく同じで、物語りもほぼ同じである。ちがうところは、主人公の男が都へ行き、ひとわたり理智的な分析をしてのち、自分の仕事や前途を計算した結果、自分を抑えて鶯鶯と絶交することである。唐史に記された作者の生いたちからすると、彼はとある没落貴族の出身で、自分の境涯から脱出するためには、名門の家と婚姻関係を結ばざるを得ず、そこで翻然として改悛し、昔の出来事を一編の小説に書き上げ、その後段に、大々的な議論をつけくわえた。

「大よそ、天がつくりだした美女というものは、その身を亡ぼさねば、かならず人にわざわいをなす……私の能力では、この魔力にうち勝つことができない。だから欲情をこらえたのだ。」

この文章は、人々の鶯鶯に対するはげしい愛惜の情をもたせることになったし、その上、多くの人々に自分の思想や能力をほめたたえさせることになった。（第三章で引用した、陳寅恪先生の〝読鶯鶯伝〟という文においてすでに討論ずみである。）

この二編は、小説ではあるが、当時の社会によく見られる悲劇である。同じような社会的条件のもとでは、同じような悲劇が発生するのは奇をするにあたらない。この二編は真実の物語であるばかりか、これ以外にも多くの同じような、またはもっと悲惨な人生の物語が、当時の社会という舞台の上で演じられていたのである。唐人

のこういった方面でのいろいろな記載、ことに小説は数多いが、紙面の関係で、述べつくすことはできない。作者按ずるに、歴代の学者の鶯鶯伝に対する考証はたくさんあるが、観点がちがい、一つ一つそれを論ずることはむづかしいので、いっそのこと、何も言わない。陳寅恪先生の「続鶯鶯伝」に十分に論じてあるので、ここは簡単にし、つけ加えないことにする。

第五節　鶯鶯伝・霍小玉伝の時代と形式

小説の内容と形式から見るならば、鶯鶯伝は、霍小玉伝よりさきに書かれているようだ。

唐の徳宗の貞元二十一年八月は。順宗の永貞元年である。元稹が韋氏を娶ったのが徳宗の貞元十八年であり、又、鶯鶯伝の中で、「のち一年ほどして、崔はすでに人に身を委せ、張もまた結婚していた。」と言っている。この二人の恋愛事件は、（張生が作者元稹の分身であることは一般に認められている。）貞元十六七年頃に発生している。小説では、「貞元の歳九月、執事の李公垂が、私の靖安里の家に泊り、この話をすると、公垂は大いに驚いてすばらしいと称し、そこで鶯鶯歌を作った。」とある。このことから鶯鶯伝の作られたのは、貞元十七年か又は二十年の九月までの間とするのがもっとも合理的であろう。又、元稹はもともと明経に合格したのだが、進士でないことを恥じて、もう一度進士科の試験をうけて合格しようと懸命であった。一方で韋氏と結婚し、一方では鶯鶯伝を書いて自己弁護した。長慶年間に、思い通り仕官することができ、李紳と一緒に穆宗に寵愛され、李党の連中とグルになった。裴度・李宗閔とは仲が悪かった。元稹は一度、短期間の宰相をつとめたが、のち攻撃されて降ろされた。これはかなり後の話である。彼の最初の夫人韋氏が死んだのは天和四年七月（憲宗期）である。（〈韓昌黎集〉二四　韋氏墓誌）。のち元和五年に左遷されて江陵へ行かされている。この時に、「婚」と「任」はともに失敗したわけである。彼の作った「夢遊春」という長律の詩の中に、

「我到看花時、但作懐仙句……一夢何足云、良時自婚娶……高松女蘿附、韋門正全盛……雖云覚夢殊、同是終雖駐……」

（私は花見の頃に、あの仙女をなつかしむ詩をつくるだけ（鶯鶯との恋愛）……あれはもう言っても甲斐ない一場の夢、時を得て自ら妻を娶った。（韋氏との結婚）……高い松に女蘿がまといつくように、韋の家はいま全盛で……寝覚めの思いはひとしおといわれるが、二人ともにいまは私のもとに居りはしない。（韋氏の死と鶯鶯の嫁したこと）

白居易の「和夢遊春詩」は元稹と鶯鶯の恋愛事件をより率直に詳細に書いている。これらの詩が書かれた時は、事はすでに、うたかたの如く消え去った後のことであり、描かれているのは過去への追憶と憧憬の情なのである。

霍小玉伝の書かれた時代は小説の中には暗示されていない。ただ小説の内容と形式から考えると、霍小玉伝はあきらかに鶯鶯伝のあとで書かれている。作品の輪廓が似ているだけではなく、作中の詩句も鶯鶯伝にならっている。例えば李益が小玉にはじめて会った時母親は小玉に

「お前の愛誦する『開簾風動竹、疑是故人来』（簾動かし吹く風に、竹の葉さやぐ音聞けば、恋しき人の訪れと、心はあだに騒ぐなり）という詩は十郎様の作よ」

と言うが、これはあきらかに、鶯鶯伝の中にある、明月三五夜の詩「待月西廂下、迎風戸半開、払牆花影動、疑是玉人来」（西の廂

に月待てば、春風木戸を押し開けぬ、垣根にゆらぐ花影を恋しき人の訪れと、胸さわがする我が身かな）の詩句からヒントを得ていると思われる。

作者は蔣防ということになっているが、この人物については、（〈全唐文〉七一九）に、彼が李元和の頃に李紳に招かれた席で

「幾欲高飛上天去、誰人為解緑糸羈」（幾たびか天をさして高く飛ぼうとしたのだが誰かこの身分卑しい自分の気持をわかってくれないものだろうか）という詩句を吟じ、李紳に賞められ、その推挙で、翰林学士中書舎人となった、とあり、又全唐文には彼の多くの賦と制・議（文体の名）が載っているので、彼が文筆家だったことがわかる。長慶年間に牛党が勢力を得た時、李党派とされて汀洲刺使に左遷され、後連州刺使にかわった。彼がその後どのくらい生きたかはわからない。ただ霍小玉伝の主題は徹底して進士の浮薄さと裏切りや不誠実という欠点を暴露し、ヒロインに対しては限り無い同情と憐憫をよせているように思われる。これは牛李の党争を背景にしたとすれば、無理なく理解できよう。そこから小説の成立時期は作者の左遷以後と考えるのが合理的である。ただ正史の記載によれば、李益は太和（文宗）の初めに礼部尚書になり、貢挙を主管するなど歳とってからの政治生活はうまくいっているようだ。又小説の後半で幽霊が出て、李益に女房を疑わせたりするくだりは、正史の記載と符合し、どうやら話が事実に基いているらしい。ただ作者蔣防と小説中の主人公が、同時代人なので、作者が主人公の実名を出しているとはちょっと信じがたい。小説の形式や作者の技法から見ると、この作品はすくなくとも長慶又はそれ以後の成立と考えられる。だから仮に上記の疑問に一理あるとすれば、この作品は更に時代の下った開成（文宗朝）以後の成立で、蔣防に仮托して李益の話を書き、進士の浮華を暴露したという可能性が高い。でないと蔣防は貞元ごろ（徳宗朝）の生れだから、代宗の大歴年間からあまり遠くない頃に生きていたわけで、その時代の人間が、霍小玉を霍王の末娘にしたて上げるということ（明らかにウソとわかる）をなぜするのかわからない。したがってこの小説の成立は、前代の史実があまりはっきりしなくなるほど時間がたってからだと考えた方がよかろう。

霍小玉伝における作者の表現技巧は、進歩し、複雑化している。まず形式面から言えば鶯鶯伝は古文の作家たちが小説を試作している頃の作品であり、仏教小説の模倣という面が多分にある。たとえば作中に三十韻の会真詩一首を挿入したり、末尾では作者が作中に顔を出してひとくさり陳腐な議論をしたりする。これらは近代小説の条件から言えば、ともに芸術的完結性にとっては無用なものである。しかし初盛唐期の古文家から見れば、これこそ完成された小説の典型なのである。しかし霍小玉伝はそれとちがって、作者は「古文」の為に小説を書いたのではなく、小説の為に小説を書いたのである。「韻文部分」の歌や「議論」もなく完全に一編の小説になり切っている。又、作者は、きわめて進歩した技法をもっている。主題への正面からの取りくみのほかに主題を脇からささえ、背後から浮き立たせることにより、より深く、より高い効果をあげる手法である。小玉が死ぬ寸前に、一人の豪侠の若者を登場させて、波瀾をおこさせ、男女二人の主役が、最後の対面をさせるべく力をつくさせ、その上、二人の宴会の酒肴のめんどうまで見させるのである。この若者の侠気ある行為は、読者の興味をひきおこし、ヒロインに対する読者の深い同情の気持を刺激するだけではなく、ヒーローの背信と薄情さを一層くっきりと浮びあがらせ、読者の彼への憎しみを倍加

させる。このような創作技法による効果にあきたらず、作者は作品の後半部に死者による報復という迷信話を挿入し、報復の意識を滲みこませる。これは読者に仇討ちの快感を味わわせるだけでなく、ヒーローの罪業が許すべからざるものであることをより深刻に表現するのである。作者はここまで書いてくると、彼の創作の動機は完全にその目的に達してしまったと言えるのである。

編巾の長さにおいて、霍小玉伝は鶯鶯伝にくらべて勝っているだけではなく、形式の上でもより小説的になっている。ことにその技巧においては、霍小玉伝の構成の複雑さは、鶯鶯伝の簡単で素朴なことと較べて、同日に語るわけにはいかないのである。だからここで強いてこの二つを分類すれば、鶯鶯伝は、「文士」の作った小説、霍小玉伝は「小説家」の作った小説と言うことになるのであろう。

附録

「四姓の人々は太原の王氏が婚姻関係を結ぶことをよろこび、王氏は『銀かざりの家』とよばれた。地は銀なのに金で表面を飾った家という意味である。」（李肇〈国史補〉）

「張説は山東貴族との縁組みを望んでいたが当時の人々はそのことを良くいわなかった。後に張家と婚姻した者が言い訳をして言った。『鄭氏は栄陽にこもりっきり、岡のほとりの盧氏、沢の底にいた李氏、お役人の崔氏』彼等は科挙で一番から三番までを独占した。」（同）

唐代には五姓の家柄がもてはやされたが、そのうちでも崔氏と盧氏がとび抜けていた。娘があればいながらにして大金を得ることができた。家柄の高くない家の場合には百万の結納金がなければその娘を娶ることができなかった。（霍小玉伝でもそう言っている）世間の人々はそれでも足りないのではないかと心配するほどであった。思うに崔氏は五姓のトップであるから、もし鶯鶯がほんとうに崔氏の出で、母親が鄭氏だとすれば、その身分は最高である。元稹がもし「愛」から出発したとすれば、勿論、「はじめに乱して、後に棄てる」というような態度はとらないだろうし、又、もし「功利」を求めたのだとすれば、崔氏をすてて、別の韋氏の娘と結婚するわけがない。したがって鶯鶯の出身は、霍小玉と同じだったのだ。崔とか鄭とかいう名門の名前は、作者が体面をつくろうために勝手につけたにすぎないのであろう。

訳者註

鶯鶯伝・霍小玉伝の成立年代について、劉開栄氏は、鶯鶯伝については貞元十七年（801）～二十年（905）九月の間と推定、霍小玉伝は、作者を蔣防とすれば長慶年間（821～824）作者を蔣防以外の人とすれば開成年間（836～840）であろうと推定している。以下、他の説を紹介しておく。

1　近藤春雄　鶯鶯伝は元稹の左遷後の元和五年（810）とし、文末の貞元の歳九月、とあるのは、伝の成側時期を示すものではない、とする。また霍小玉伝は、元和年間（806～820）大和元年（827）以降、長慶年間（821～824）の三つのうちいずれかであろうと言う。〈唐代小説の研究〉

2　王夢鷗　霍小玉伝の成立時期を元和初期～十年以前（806～816）とし、〈関於霍小玉伝之作者及其字作動機〉又、元和三年ごろと推定する。〈霍小玉伝之作者及故事背景〉

3　内山知也　王氏の説を批判検討した結果これに疑問を呈し、結局、劉氏説を支持している。〈隋唐小説研究〉